

中国四川省大地震 パンダタオルプロジェクト 「第4回現地報告会」報告書



[日時] 8月10日(月) 19:00~21:00
[場所] 名古屋国際センター 第1会議室

[内容]

- ① 現地報告： 浦野愛（特定非営利活動法人レスキューストックヤード常務理事）
コメンテーター： 渥美公秀さん（日本災害救援ボランティアネットワークNVNAD理事長）
コーディネーター： 栗田暢之（特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事）
- ② 意見交換： テーマ 「これから私達にできる支援について」

[主催] 特定非営利活動法人レスキューストックヤード
[共催] 特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）
[協力] 特定非営利活動法人CODE海外災害援助市民センター
[後援] 財団法人名古屋国際センター、 名古屋市

中国四川大震災パンダタオルプロジェクト 第4回現地報告会

[これまでの経緯と趣旨]

2008年5月12日に発生した中国四川大地震を受け、RSYでは6月16日、名古屋国際センターにて「現地報告と今後の支援を考える会」を開催しました。当日は100名を越す参加者が集まりました。その後、有志で作業部会を立ち上げ、「被災地を忘れない・思いを馳せる・気持ちを届ける」をキーワードに、日中友好のシンボルであるパンダを象った手拭タオル「パンダタオル」とメッセージカードを作成し、被災地に送る活動を始めました。この企画を「中国四川大地震パンダタオルプロジェクト」とし、10月から現在まで、聾学校や国際交流に関わるイベント、当方主催のパンダタオル手作り教室等でパンダ作りを行っています。

11月6日～11日には、中国四川省への被災地視察調査に参加し、皆さんの心のこもった「パンダタオル」を現地へお届けするチャンス頂きました。しかし、11月に行った第2回現地報告会では参加者約40名であり、既に「被災地の風化」が大きな課題となっていると感じました。

そんな中、震災当初から瓦礫の撤去を行い、現在は地域全体の復興支援を継続しているCODE海外災害援助市民センターは、活動中に会った住民の方が「私たちに関心をもってくれてありがとう」と何度もお礼を言われたことが印象的であったと報告しています。

今年の7月11日～14日、2度目の訪問が実現し、約400個のパンダタオルを手渡すことができました。今回の目的は、①パンダタオルのお届け②来年3月に予定している日本のボランティアと被災者の「減災交流ワークショップ」実施のための顔つなぎ・信頼関係づくり③中国の復興過程の現状を把握することの3つでした。

長期に渡る被災地復興を支えているのは、日本での災害の時と同じように『相手の心に寄り添う気持ち』であると改めて感じます。これまで多くの方々がパンダタオルを通じて繋がり、被災地へ思いを馳せ、また自分の住む地域の防災対策についても感心を寄せ始めました。今回現地の最新情報を協力者のみなさんに報告すると共に、今後も支援の輪が少しずつ広がっていくことを願い、第4回報告会を実施しました。

【現地報告／浦野】

■「北川県 香泉郷光明村の報告（浦野）」
光明村は、CODE 海外災害援助市民センター（以下CODE）が支援に入っている村です。今、耐震性の高い木造建築の家を再建しているところです。ここでは、パンダタオルを20個～30個配ることができました。現地の方は、「当時は揺れがひどく、とても怖かった。しかし、多くの方が助けてくれた。CODEの方がとてもよくしてくれた。」「夫の職がなくなり、自分が働かなくてはいけない。ここで、カーテン屋をやっとうと思っている。」と話す方もいました。またパンダタオルを見て、「つくり方を勉強したい。」と言ってくださる方もいました。今回2回目の現地訪問ができたのは、中国で活動をしているCODEの方がいてくださったことが非常に大きいです。私が突然現地に入っていたら、現地の方は快く受け入れてくれなかったと思います。また、この村の村長さんに来年3月に日本の方を連れてきて、ここで交流会をやらせていただくことができるかをお聞きしたら「よい考えだ。」と前向きに受け止めてくれました。

「コメント（渥美さん）」

CODEがやっていることは、光明村の一人ひとりの名前を知っていること。一人ひとりと関わりがつかれていることです。CODEがやっていることは本当に素晴らしいと思います。

■「什邡市 高齢者施設の報告（渥美さん）」
高齢者施設では、約300個のパンダを渡すことができました。ここは、私が以前訪問したところです。多くの方が、メッセージをじっくり読んでくださいました。今回は、復興の現状を知ることができました。被災した場

所は、中国各省のうち、どこが応援するかが決まっています。この「対口政策」によって、応援するところがお金を持っていると、復興はとても早くなります。とてもきれいで立派な老人ホームが建設されている中、まだ補修の手が入っていないところもありました。同じ被災地なのにこれでいいのかと正直思いました。あまりの支援の対比の違いにびっくりしました。



「常務理事浦野より、現地報告」

■「綿竹市 遵動鎮棚花村の報告（浦野）」
棚花村は、住民約1200名のうち40名が亡くなられている場所です。家屋の倒壊率がとても高いところです。年画（壁に書かれている絵の名前）が有名で、江蘇省から支援をしてもらっていますが、耐震はよくありません。私達は子供や高齢者のいる20世帯くらいを回りました。お会いした年配の女性は、「あのときはすごく怖かった。」「自分の子供もすぐに来てくれないのに、わざわざ日本からよく来てくれたの。」と涙を流されました。ここでも、メッセージカードや熊猫通信を熱心に読んでくれました。日本から来た私達のことを理解し、好意的に受けとめてくれたと思います。

■「旧北川县城の報告（浦野）」

ここは、地震後大雨が降ったため、被害が拡大した場所です。死者やいまだ瓦礫の下敷き

になり埋まっている人々をともらう石碑があり、一つの観光スポットとなっています。被災地の近くには、テントが並んでいて、写真集やDVDを売っていました。政府は、この場所をそのまま残し、今後観光地にする予定です。

「コメント（渥美さん）」

この地域から少し離れた場所に、新北川県城という新たな町を、お金をかけてつくっています。住民たちには、引っ越しするためのお金があるのか、新北川県城に住むことが本当の復興なのだろうかと思いました。

■「北川県 汶川（チャン族の集落など）の報告（浦野）」

もともと少数民族が住んでいる地域で、住宅の大部分が大きな被害を受けました。文化建築や、刺繍が有名です。国が観光地化をねらい支援しています。伝統建設を残そうと、観光向けに作り直し、チャン族はこの場所に住んでいます。

「コメント（渥美さん）」

たまたまこの地域に住んでいたチャン族の集落だけが、国が建てた文化建築の家に無料で入居しています。今は無料ですが、観光で得た収入からいすれ返済することになっており、いつ政府に返金をせまられるか分からないと不安そうでした。しかし、立派な居住場所と仕事が与えられています。この集落だけを観光地化をすることで、被災地の復興格差が生じるのではないかと思います。

■今後の活動について

・10月下旬：第3回現地訪問(熊猫通信第2報とパンダタオル未配布地区へのお届け)

・11月下旬：「第5回現地報告会」の開催

・来年3月：減災の知恵と体験の交換「減災交流ワークショップ」・「第6回現地報告会」の開催

※月2回～3回のRSYボラデー「パンダタオル手作り教室」開催・パンダ通信の発行は継続します。

今後の活動は、『株式会社ラッシュジャパン「LUSHチャリティバンク」助成金事業』で実施します。

今回は多くの方々に協力していただきました。以下協力者一覧

・NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD):パンダタオル・通信配布同行

・CODE海外災害援助市民センター:現地コーディネーター・通訳

・JAL日本航空:航空券の手配・パンダタオル運搬費負担(中部国際空港→上海間)

・財団法人名古屋国際センター:熊猫通信・メッセージカード中国語翻訳

・パンダタオルプロジェクトボランティア:パンダタオルの作成

実際に現地へ行き、家の再建、生活の立て直し、借金の返済なども問題に取り組み始めていると感じました。国は、住宅再建など、ハード面での支援はしていますが、被災者は、発災直後の地震の揺れの恐怖感をまだひきづっていると感じました。その中で、パンダタオルプロジェクトは、一人ひとりの気持ちを明るくしたり、ほっとできる時間を作ることができているのではないかと感じました。思いを伝えることは、国や言葉の壁を越えて繋がることができ、そのきっかけは、パンダタオルがあったからだと思います。作り手の気持ちが、中国のみなさんに伝わったと思います。また、手渡しすることに意味があることを実感しました。

【意見交換（これから私達にできる支援について）／浦野】

「参加者から」

- ・これから多くの場所で、パンダタオールプロジェクトのことを広めていきたいと思います
- ・2年目、3年目の被災地取材し、パンダタオールを通じて現状を日本に伝えたい
- ・通訳としてお手伝いができればと思います
- ・このパンダタオールプロジェクトが、身近にできることの一つであると思いました
- ・子どもたちも一緒に活動に参加ができればいいなと思いました
- ・パンダタオールと作ってみたいです
- ・自分は現地へ行くこともできないし、裁縫も得意ではありません。何もできないじゃないかと思いました。しかしそうではなく、できることはあると、きっかけを作ってくれました
- ・中国の現状を知ることができました。被災地を観光地化したり、観光することについて、日本では考えられず、スケールが多いと感じました
- ・中国の人はたくましいと思いました。観光地にするのは納得がいきませんでした
- ・私は大学生ですが、お金はありませんが多くの時間はあるので、有効に使っていききたいと思っています
- ・気持ちを伝えること、行動を起こすことの大切さを学びました
- ・被災者の気持ちを支えるため、継続的な支援が大切だと感じました
- ・日本の活動が、中国への支援につながっているということを感じました
- ・中国は、経済格差があると聞きますが、復興でも格差が出ていることを改めて感じました
- ・復興には、時間がかかるということを知り、今日の報告を聞き、感じました
- ・違う国へ行って、ここまで活動されている皆さんの姿を見て、中国人の一人として受けた感動が大きい。自分のできることから考えさせられま

した



「まとめた意見をグループごとで発表」

「コメント（渥美さん）」

今回は、国家体制、制度について報告させていただきました。思いをはせ、気持ちを伝えるということは本当に大事だと思います。しかし、日本の考え方と、中国の社会は違うということも知っておくことも必要です。今回パンダタオールの力を感しました。震災後2年、3年と見据えて、これから何ができるのかを考えるのかを考える時期なのではないかと思います。みなさんが今日出してくださった意見、今後に生かしていけるように協力させていただければと思います。

「コメント（代表理事栗田）」

第4回目になると、参加者の人数はさみしいものです。しかし、数の問題ではありません。1年で被災地が復興するわけではありません。私達が支援する思いとしては、現地と交流関係をつくり、復興する過程で寄り添いたいということです。被災した中国と、これから起こる東海・東南海地震を前にした日本で、それぞれの若者が今後に向けて交流を兼ねて話し合う場ができることを願い活動をしています。パンダタオールはそのかけ橋です。

「中国のみなさんのことを忘れていない」この気持ちを大事にして、パンダタオールプロジェクトを細々とではありますが、進めていきたいと思っております。